

看護実践開発研究センター

## 2014 年度「緩和ケア」・「認知症看護」認定看護師コース

### 修了式式辞

「2014 年認定看護師度認定看護師教育課程〈緩和ケア〉および〈認知症看護〉の修了式」に際しまして、山梨県福祉保健部医務課看護指導監市川敏美さま、山梨県総務部私学文書課総括課長補佐掛川浩正さま、山梨県看護協会会長藤巻秀子さま、県立大学同窓会白樹会会長山本美代子さま、その他県内外の医療関係者のご出席を賜り、ありがたく厚くお礼申し上げます。

当課程「開講式」は初夏の6月2日、早いものであれから7か月が経ちました。おそらくみなさんは、ここへ入学する以前にはそれぞれの現場で実に多忙に働いておられたはずで、それはそれなりに輝いてはいたもののややもすれば自分のペースではなく外的状況に振り回されて時間を経過する生活だったのではなかったでしょうか？。それが、本課程に進学されてからは、ご自分の仕事の意味や、病む人の想いを改めて確認する稀有な機会となったのではなかったでしょうか？。つまり、この7か月は大変忙しかったけれど相当に衝撃的で充実したゆたかな時間を送られたであろうと、私は、過去約200人の修了生のみなさんの体験から想像しているところであります。

今年度の看護実践開発研究センターの認定看護師教育課程は異例で、「緩和ケア」と「認知症」の両コースを同時開講致しました。もとより看護技術の領域からいけば両者は異なる専門には違いありませんが、人間の生の終末またはそれに近い現場における技術の修得、つまり「命の時間」がここでは両課程共通のキーワードとなっております。しかも「長いのか？短いのか？を問う〈人の一生涯〉」という「時間」の量と質の問題です。

ところで・・・・； 〈人の一生涯の時間〉と言えば私の脳裏にすぐに浮かんでくるのは兼好法師の「あだし野の露消ゆる時なく」で始まる『徒然草』の第7段です。

「あだし野の露消ゆる時なく、鳥部山の煙立ち去らでのみ住み果つる習ひならば、いかにもものあはれもなからん。世は定めなきこそいみじけれ。」というあれですが、兼好法師はここで死を積極的に肯定しています。「世は定めなきこそいみじけれ。」とまで言うのですが、これはいわゆる「無常観」ですね。しかも単なる観念だけではありません。

「命あるものを見るに、人ばかり久しきはなし。かげろふの夕べを待ち、夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし。つくづくと一年を暮すほどだにも、こよなうのどけしや。飽かず、惜しと思はば、千年を過すとも、一夜の夢の心地こそせめ。住み果てぬ世にみにくき姿を待ち得て、何かはせん。命長ければ辱多し。長くとも、四十に足らぬほどにて死なんこそ、めやすかるべけれ。」

40歳より前に死ぬのが格好いい、特に「つくづくとこよなう」暮せばくひととせ、つまり一年で死んでも良いとまで言い切ります。「つくづくとこよなう」という暮らし方がどういうものか具体的には理解できませんが、「しんみりともものあはれを感じて暮らせば」ということらしいのです。そんな暮らしがこの弱肉強食の現代社会にあってあり得るのかどうか、疑問無しとしません。

ただし、このように述べていた兼好その人は、1283年（弘安6年）の生まれで1350年（正平5年）没ですから、なんと享年68歳という当時としてはまさに健康（兼好）で長命。しかも死亡年が2年後の1352年説もあるので70歳だったかもしれません。もとより人の寿命は自身が決定するものではありませんから、長短は兼好法師といえども不可知であって天が決めることです。問題は人生の質つまりクオリティ・オブ・ライフ QOLこそが問題です。だから兼好も最後にこう書いています。

「そのほど過ぎぬれば、かたちを恥づる心もなく、人に出で交らはん事を思ひ、夕べの陽に子孫を愛して、さかゆく末を見んまでの命をあらまし、ひたすら世を貪る心のみ深く、ものあはれも知らずなりゆくなん、あさましき。」。つまり、兼好法師は世俗への執着を断つことで生きる価値＝QOLがうまれるのだと言っているわけであります。残念ながら凡夫の身の私などにはこうはいきません。

グローバル市場経済とよばれる強欲な資本主義が生死をかけて国家間・企業間・個人間で闘わされる時代がやってきました。先の総選挙で争われたアベノミクス論争など、畢竟この欲望の闘いに勝つのか負けるのかの闘争に他なりません。そんな生き馬の目を抜くような闘いなら勝っても負けても兼好法師が言うところのQOLには決して至りません。こういう過酷な時代にあってもなお人々の終末を形有るものに纏めあげてやるという崇高な仕事があり、終末ケアということでもあります。数週間前の山日新聞紙上では認知症症状を呈する患者の扱いが全国の医療機関で困難を極めているという報道がありました。そういう時代のプロフェッショナルとして社会の期待を背負っていることを修了生のみなさんは是非承知していただきたいと思います。

最後に、看護実践開発研究センターの教職員をはじめ実習や視察などをつうじて本教育課程にご参加いただいた学内外の全機関と全先生方に心から敬意と感謝とを表しながら学長の感謝とお祝いの言葉と致します。

ご清聴ありがとうございました。